

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	渡邊 翔 印
所属機関	国立がん研究センター中央病院
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	Connective Tissue Oncology Society 2017 Annual Meeting
渡航期間	自 平成29年11月7日 至 平成29年11月13日
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	ドキソルビシン耐性後の肉腫患者の予後予測モデルの確立
<p style="text-align: center;">研究成果 （ 要約：800字 ）</p> <p>軟部肉腫の切除可能例に対しては手術や放射線療法が根治的に行われるが、切除不能/再発例に対しては病理学的な分類に基づいて化学療法が用いられる。中でも多数を占める個別化治療のない軟部肉腫に対しては、ドキソルビシン（DXR）が標準的な初回治療である。</p> <p>しかし、DXRの奏功割合は10～20%、無増悪生存期間は5か月程度であり、ほぼ全例で腫瘍の増大が認められる。DXRに対する耐性を獲得した軟部肉腫に対しては、標準治療が確立されておらず、症例毎に治験等を含めた二次治療が行われている。そのため、DXR耐性を獲得した後の軟部肉腫の予後に関しては、詳細な検討が行われておらず、不明な点が多い。</p> <p>そこで、DXR耐性後の予後予測因子を同定する目的で、2010年1月から2016年6月までに当施設で初回治療としてDXRを投与した57人の軟部肉腫症例について、後ろ向きに検討を行った。DXR治療開始後に腫瘍増大（Progression disease, PD）を認めた時点を中心として、死亡または最終生存確認日までをPost-progression Survival（PPS）と定義した。その結果、DXR開始後にPDを認めた時点でのPerformance status不良（≥ 2）（1.4 vs 11.3か月、$p < 0.0001$）、および新規の肺転移の出現（6.8 vs 11.8か月、$p = 0.05$）が、PPSと有意に相関していた。追加で行った解析では、PPSと全生存期間は有意に相関しており（$\gamma = 0.07$, $p = 0.01$）、PPSの予後を予測することで、患者の生存期間の推測につながる可能性が示唆された。</p> <p>これらの結果に加えて、今後PPSおよび全生存期間を目的変数としたロジスティック解析を行い、より精度の高いDXR PD後の予後予測モデルを確立することを目指したい。</p>	